

森まゆみ

樋口一葉の
手紙教室

『通俗書簡文』を読む



ちくま文庫

ひぐちいちよう てがみきょうしつ
樋口一葉の手紙教室 『通俗書簡文』を読む

二〇〇四年五月十日 第一刷発行

著者 森まゆみ（もり・まゆみ）

発行者 菊池明郎

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前二―五―三 千二一―八七五五

振替〇〇―一六〇―八―四二二三

装幀者 安野光雅

印刷所 株式会社精興社

製本所 株式会社積信堂

ちくま文庫の定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本及びお問い合わせは左記へお願いいたします。

筑摩書房サービスセンター

埼玉県さいたま市北区櫛引町二―六〇四 千三三―一八五〇七

電話番号 〇四八―六五一―〇〇五三

© MAYUMI MORI 2004 Printed in Japan

ISBN 4-480-03938-4 C0195

ちくま文庫

樋口一葉の手紙教室

『通俗書簡文』を読む

森まゆみ



筑摩書房

目次

ことばの自由への道 11

新年の部

年始の文●同じ返事 17 としの始友におくる●同かえし
21 歌留多会のあした遺失物をかえしやる文●同返事 27

春の部

余寒見舞の文●同じ返事 33 初午に人を招く文●同じ返事
37 初雛祝いの文●同じ返事 41 小学校の卒業を祝う文●
同じ返事 45 春雨ふる日友に●同じ返事 49 花見誘いの
文●同じ返事 54 花の頃都にある娘に●同じ返事娘より
59

夏の部

- 花菖蒲見に誘う文●同じ返事 69 新茶を人におくる文●同じ返事 74 人の新盆に●同じ返事 78 暑中見舞の文●同じ返事 83 雷鳴はげしかりし後友におくる●同じ返事 87

秋の部

- 草花に添えて人のもとに●同じ返事 95 野分見舞の文●同じ返事 99 人の家に菊植たりけるを聞て●同じ返事 104 紅葉見に誘う文●同じ返事 108

冬の部

- かりたる傘を時雨ののちかえす文●同じ返事 115 冬のはじめ仕立物の手伝いをたのむ文●同じ返事 120 雪の日人のも

とに◎同じ返事 124 歳暮の文◎同じ返事 129

雑の部

祝いの文

婚礼祝いの文◎同返事 137 開業祝いの文◎同じ返事 142

依頼の文

媒妁たのみの文◎同じ返事 146 猫の子をもらいにやる文◎
同じ返事 151 書物の借用たのみの文◎同じ返事 154 留守
中たのみの文◎同じ返事 159

忠告の文

愛犬の行衛なく成しを友につぐる文◎同じ返事 164 友の驕
奢をいさむる文 171 離縁を乞わんという人に◎同じ返事
176 事ありて仲絶えたる友のもとに◎同じ返事 182

あやまりの文

留守中来たりし人のもとに●同じ返事 191 人の家の盆栽を

子のそこないつるに●同じ返事 197

お礼の文

雇人の周旋を受けし人のもとに●同じ返事 202

招きの文

法事に人を招く文●同じ返事 207

お見舞の文

試験に落第せし人のもとに●同じ返事 211 不縁に成し人を

なぐさむる文●同じ返事 216 愛子をうしないし人のもとに

●同じ返事 222 火事見舞の文●同じ返事 228 地震見舞の

文●同じ返事 231 死去を弔う文●同じ返事 236

手紙を書く際の注意いくつか 244

*

半井桃水への手紙 249

*

一葉の実像をさがして——文庫のためのあとがき 255
解説 優雅で人情ゆたかな時代 福原義春 265



樋口一葉の手紙教室
——『通俗書簡文』を読む



明治 21 年頃女学生姿で太田竹子(左)
と撮影 (木下杢太郎記念館所蔵)

本文図版「風俗画報」より

ことばの自由への道

人から手紙を貰うのはうれしい。これほど電話やEメールが発達した現代でも。夫の転勤についていったある友は、友だちもまだできない地方の町から「郵便受けにあなたの手紙を見つけると、砂漠でダイヤモンドを拾ったような気がします」と書いてきた。そういわれると張り合いもあって、せっせと手紙を書こうと思う。

こうした気安い幼なじみへの手紙や、他のことは放つてもいま我が心を伝えたい、と筆が走る恋文はいざしらず、お礼の手紙、頼み事の手紙、断わりの手紙などは気が重く、つい一日のばしにしがちだ。頂きものをしたその日折返し、電話でお礼をいうのも少し余韻がない。せっかく静かに差し出されたものには、心深い手紙で応えたい。

これから紹介する『通俗書簡文』は、明治二十九年十一月二十三日、満二十四歳で

亡くなった作家、樋口一葉が書いた手紙の書き方の実用書である。亡くなる年の五月に博文館より発行、一葉の生前に唯一、本の形で刊行された。本書では樋口一葉全集第四卷下（一九九四年六月、筑摩書房刊）を底本に、たまたま入手できた明治四十三年の二十八版、大正五年の四十二版の『通俗書簡文』を参照し、解説をほどこしながら、明治女性の手紙の書きかた、季節の中での暮らしの機微を考えてみた。

肺結核で死期の近い一葉には、このような実用書ではなく、小説など本来の仕事をもつとさせてあげたかった気もするが、さすがに「たけくらべ」「にぎりえ」の作者一葉ならではの美しい文章が並び、一例ごとに小説家ならではの想像力の駆使されたユニークなものである。

「通俗」は現在とはニュアンスがちがって、「俗っぽい」とか大衆迎合という意味ではない。「わかりやすい」とか「誰にでも読める」「一般向き」ということだろう。明治時代にはいまの社会教育を「通俗教育」と称し、書簡のことを「通俗文」といったと『広辞苑』にある。そして本書の成功もあって、女性のための「手紙の書き方」本は増え、下田歌子、与謝野晶子、平塚らいてうら、当代一流の文筆家、評論家もこれに手を染めた。

一葉は巻頭に、手紙を書こうと思ったら、あまり肩に力を入れて大げさな言葉を選

ぶより、わかりやすく、すなおなことばで、思うところをそのまま自由に現わしたらよいのです、と述べている。

言うはやすく、行うのは難い。

一葉自身も竜泉寺町に住んでいたころの日記に、「唯^{ただ}おしき処は学あきくして、とる筆つたなく、おも^{なかば}う半をもうつすにかたければ、霞を隔てて遠山の花をおも^{ごと}うが如く手折^{たおり}ていざといい難きぞ侘しき」(明治二十六年十一月)と書いているくらいである。遠山の高嶺の花の美しさを、くまなく描きたいではないか。手折ってさあどうぞというように文にして差し出したいではないか。

さあ、一葉を先生に、手紙の書き方を学び、ことばの自由への道をたどってみよう。

新年の部